

岩手県西和賀町峠山牧場 I 遺跡 A 地区出土の 旧石器時代の石偶について

米田 寛

A Study of the Paleolithic Stone Figurine on the Togeyamabokujyo I site, Area A, Nishiwaga Town,
Iwate Prefecture, Northeast Japan

Hiroshi YONETA

岩手県立博物館 020-0102 盛岡市上田字松屋敷 34 Iwate Prefectural Museum, Ueda Matsuyashiki 34, Morioka
City, 020-0102, Japan.

Abstract

This paper is a report on the stone figurine excavated from Togeyama Bokujo Site I, Area A, Nishiwaga Town, Iwate Prefecture, Japan. I examined talc stone products reported as Venus-shaped pendants and confirmed the expression of both eyes, both arms, both legs, and a loincloth. These expressions were attributed to the Gravettian culture, which had spread over Eurasia between 30,000 and 25,000 cal. BP.

1 はじめに

旧石器時代の古日本列島では実用利器が圧倒的に多く、芸術品はごく稀に認められる。岩手県では内陸部の遺跡で旧石器時代の装飾品または装飾品候補が複数報告されている(米田 2022)が、そのなかでも特徴的な資料で「ヴィーナス型ペンダント」として報告された資料(図1・2)があり、既刊の報告書(岩文振 1999)や報文記載を尊重する形での紹介(堤 2011、長沼 2010等)も行われている。本稿ではこの資料について新発見が得られたので報告する次第である。

2 資料概要

「ヴィーナス型ペンダント」は西和賀町峠山牧場 I 遺跡 A 地区(図3)第3文化層に帰属し、II a 層(褐色~明褐色)から出土した。II 層(層厚約 50 cm)は、II a 層(褐色)と II b 層(明褐色)に分離され、その境界には AT 火山灰が含まれていることが明らかにされた。そのため第3文化層中の石器群は、後期旧石器時代後半期と捉えられ報告されている。そして同文化層の示準石器としてナイフ形石器と台形様石器が示され

ている。

「ヴィーナス型ペンダント」は第3文化層のブロック 27 から出土している。報告書記載の資料概要は以下のとおりである。

- ・滑石片岩製
- ・長×幅×厚=5.90 cm×3.30 cm×0.70 cm
- ・重量=21.01g
- ・太線刻と細線刻があり、表面は摩耗が進む。
- ・縁辺には刻目状の太線刻が廻る。
- ・放射状の細線刻が認められる。



図1 「ヴィーナス型ペンダント」とされた石製品
(岩文振 1999 カラー写真図版4を転載)

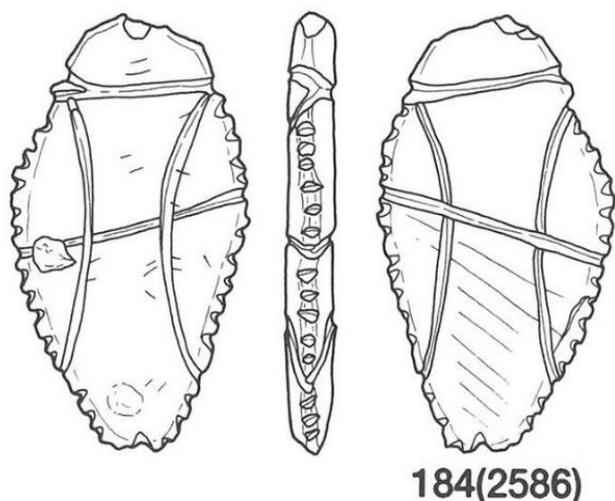


図2 報告書掲載の「ヴィーナス型ペンダント」実測図

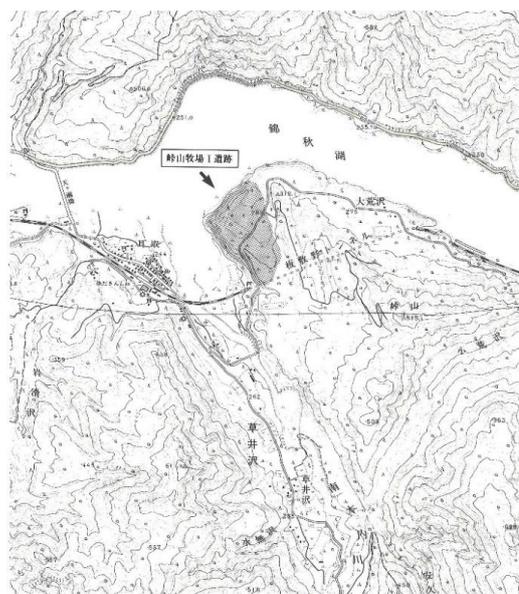


図3 峠山牧場I遺跡位置図

3 諸問題

(1) 層位・文化層の問題

報告書によれば、当資料の出土位置は、後期旧石器時代調査中にⅡa層内の淡黄褐色火山灰(AT)を包含するレベルの上位に遺物出土分布のピークがある資料群中とされ、AT降灰後の後期旧石器時代後半期のナイフ形石器石器群に伴うとされた。そしてこれらは第3文化層として報告された。これをナイフ形石器石器群主体の関東地方の武蔵野Ⅳ層下部～Ⅴ層段階に比定しているようであり、現在の研究水準からは29,000～25,000cal. BP.の年代が与えられている資料群に比定したことになる。

諸問題の発生は、報告書の内容を第三者が検証困難なことと、既存の文化層とは異なる概念で取り纏められた可能性があることに起因する。検証については座標値の記載が本書にはなく、掲載されている器種別分布図のみでは分布図の再作成が出来ない。また文化層については、第三者が認識可能な層厚での視覚的分離が可能とならない限り、文化層認定が揺らいでしまう。報告書では標高293.0～295.0mにある地層を第1～第7文化層に分離しており、一部のブロックで遺物出土垂直分布ピークが重複する図を掲載しているが、それらについての解説は少ない。報告書作成の室内整理において、遺物ドットの集合体をどうグルーピングするかが最初に検討されたのではなく、野外調査で認識・解釈された地層の細分に対して、刊行以前に広く認識されていた後期旧石器時代前半期の①台形石器群、②西和賀町内で先行調査された低湿地遺跡の大渡Ⅱ遺跡のAT層発見により認識されたAT降灰前のナイフ形石

器石器群、③AT降灰後の後期旧石器時代後半期のナイフ形石器石器群、④尖頭器石器群、⑤細石刃石器群を当て嵌めたとの印象を受ける。

この層位や文化層の問題を指摘したのは石川恵美子氏で、氏は峠山牧場I遺跡A地区の再評価を試み、重複する第3～6文化層構成要素の各石器を再検証し、第3・4・5文化層とされた資料群から、細石刃石器群に含まれるものを抽出した。また、「ヴィーナス型ペンダント」についても、「北方の細石刃文化に系譜を持つ装身具のひとつとして、理解がしやすくなるのではないだろうか」との問題提起をしている(石川2020)。

(2) 帰属時期の問題

第3文化層は近接したブロック6・12・13・14・27・28で構成される。「ヴィーナス型ペンダント」はブロック27の構成要素とされ、ブロック27の遺物出土垂直分布のピークは294.0m前後、隣接する第5文化層ブロック5の遺物出土垂直分布のピークは294.5m前後と約50cm離れているで、視覚的には別文化層認定できたことは理解できる(図4)。一方、第3文化層よりも上位に設定された第4文化層ブロック11は、293.8～293.9mとなり、ある程度傾斜地形であることを考慮しても、逆転現象の印象を受ける。このことから、層内の垂直分布を検討して文化層を設定したのではなく、他地域あるいは先行した同町大台野遺跡調査の成果を踏まえて石器群の時期別変遷を試みたと推測されるのである。

ブロック 27 は在地系石材で製作された小形縦長剥片を伴い、報告書掲載No.179 (第4図) のナイフ形石器の伴出をもって第3文化層と認識されたと考えられる。しかし、実見の限り 179 は素材打面側に僅かに微細剥離痕のある石刃であり、年代決定の根拠とはなり難い。この状況からブロック 27 の帰属は決め難く、一方で細石刃石器群や縄文時代草創期の可能性についても肯定する根拠に欠ける。第3文化層とされた石器群中にはナイフ形石器、彫刻刀形石器、先刃搔器などに打製石斧が各ブロックに伴うとされている。旧石器時代に特徴的な局部磨製石斧は第3文化層資料中にはない。すべての打製石斧がナイフ形石器石器群に伴うとすると本邦の旧石器時代遺跡として稀有な存在となる。縄文早期の土器が出土していないものの、早期の石斧が含まれている可能性も疑わざるを得ない。なお、第3文化層帰属とされるブロック 12 からは縄文時代早期の放射性炭素年代が得られている。

一方で第6文化層出土とされた細石刃石器群中に、細石刃核はあるものの、利器の細石刃の出土量が非常に少ない。石川 (2020) によって抽出された細石刃石器群に伴う石器を加えても細石刃の数量は増加しない。当遺跡では細石刃核を廃棄しながらも消耗品の細石刃の付け替え作業がほぼ行われなかったと解釈すべきなのだろうか。石川 (2020) で再構成された細石刃文化期のブロック数からは、あまりにも少ない細石刃数であり、第3～5文化層帰属ブロックを細石刃石器群が保持する剥片製生産技術のブロックの纏まりだと仮定しても釣り合わないと考える。

以上、ブロックに関する問題点を概観したが、旧石器時代調査で出土した後期旧石器時代後半期のナイフ形石器石器群～細石刃石器群が分離困難な状況で存在し、個別のブロックの構成要素から形成時期を推測せざるを得ないことを再確認した。現状では文化層ごとではなく、第3～5文化層の構成要素とされたブロックごとあるいは石器の個別の特徴から、帰属時期を類推するほかない。

では、峠山牧場の「ヴィーナス型ペンダント」はどの時期に帰属する可能性が高いであろうか。ブロックごとで見えていくと、ブロック 27 内での位置、ブロック 28 (垂飾品出土) の平面分布 (図5)、ブロック 27・12・11 間の接合資料 105 からは、両設打面の調整打面技術をもつ石刃核から寸詰りの石刃を連続製作し、それを素材として搔器や端部調整ナイフ形石器を製作す

る石器群に伴うものとしか言えないと考える。このような石器群は器種別分布図を見る限り大枠で後期旧石器時代後半のナイフ形石器石器群に伴い、概ね武蔵野IV層下部～V層段階を上限とし、IV層上部段階を下限とする石器群に対比されるものとする。

4 新知見の取得経緯

筆者は当館の令和4年度企画展「赤色に宿るチカラ」において本資料を取り扱った。展示目的は赤・黒・緑の石製品によって旧石器時代人の色彩感覚の一端を示すためであった。

資料借受の計画途上の2022年2月に、ユーラシア先史芸術の研究者・竹花和晴氏から連絡を受け、資料実見の相談を受けた。「岩手県立埋蔵文化財センターに収蔵されている当資料を以前実見したが、もう一度見て地元の研究者の意見を聞きたい。」とのことであった。新型コロナウイルス感染症対策のため日程調整が難しく、企画展期間中の休館日に実見いただく手続きを取った。それまでに竹花氏から以下の質問がメールで寄せられていた。

「はじめて実見した時に、丸いツマミ状に成形された一端 (後に頭部と認識) にニュアンス程度の三角形の両目が明確に刻印されている。この所見は今まで他の研究者から提出されていないのか。」

筆者の回答は、「1999年刊行の報告書掲載のカラー写真図版上 (図1) ではそのように見えるので、資料借受時に改めて観察してみる」とした。なお、同書の実測図上では「目」は表現されていない。資料借受後に改めて観察したところ、確かに「両目」があった (図6・7)。線刻自体は摩耗しており、新しい傷とは認めがたい。「右目」が弧状、「左目」が三角形と認識可能な形状であった。2022年7月25日 (月) の当館休館日に竹花氏にご足労いただき、資料実見を行い、「目」との認識で一致した。この経緯からも分かるように「両目」の発見者は竹花氏である。

5 新知見を踏まえての資料再検討

(1) ペンダントから石偶へ

「ヴィーナス型ペンダント」に「目」があると認識することで、下記の新知見が得られた。

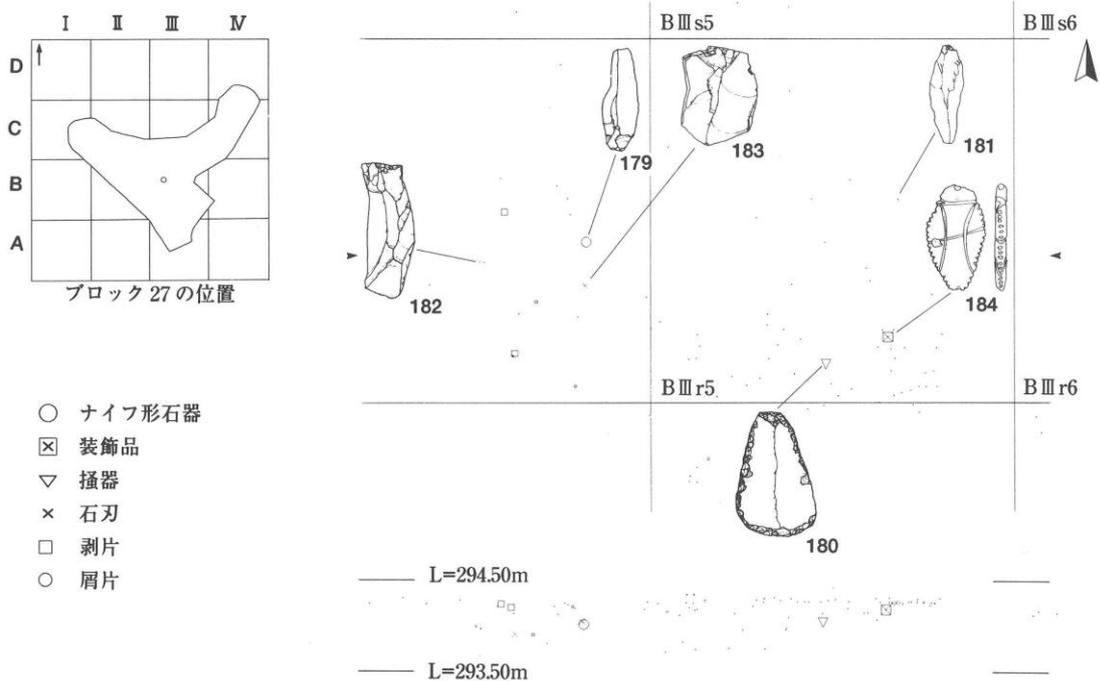


図4 ブロック 27 器種別分布図

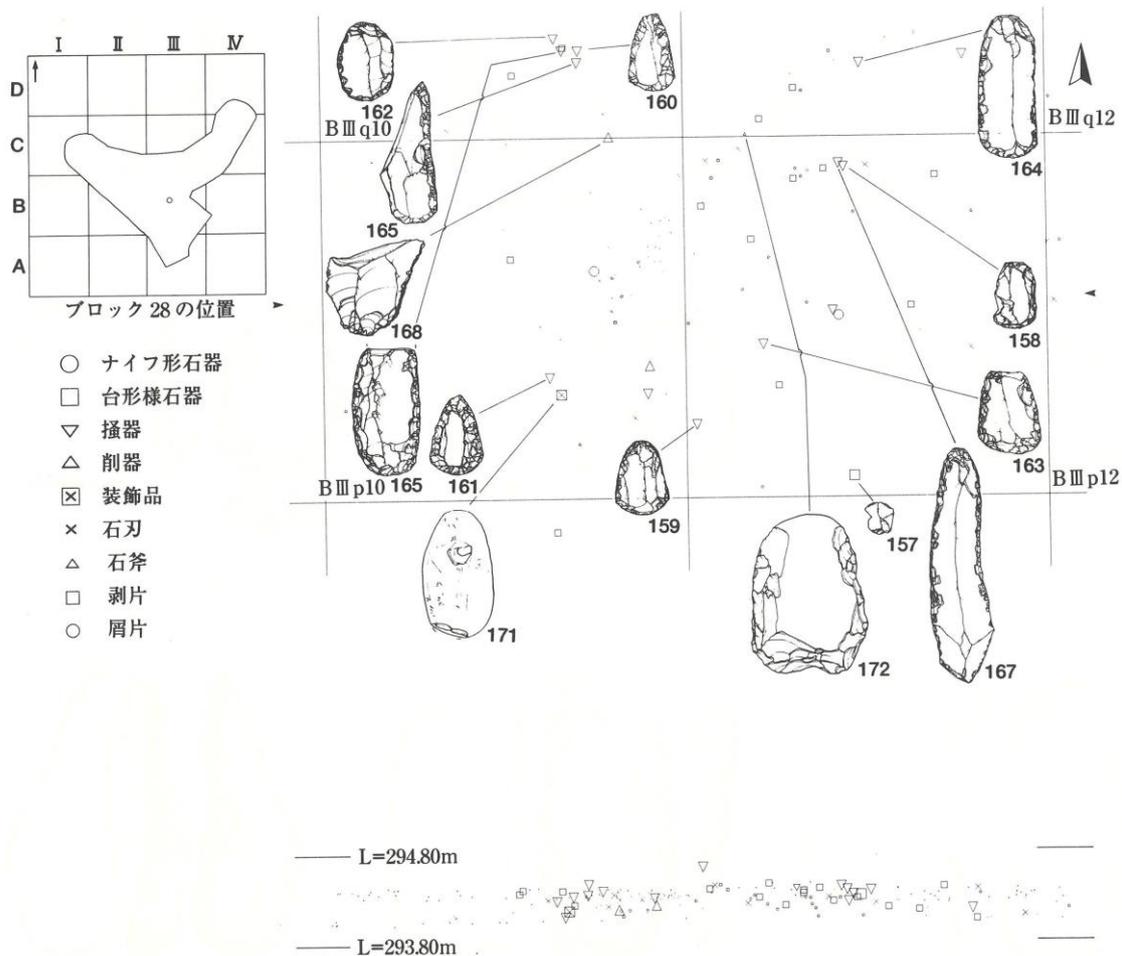


図5 ブロック 28 器種別分布図

- ①「両目」のある面を正面とすると、横位線刻で区切られたつまみ状の範囲を「頭部」と見做せる。また、目と認識することで、当資料に正面・裏面（背面）が存在することになる。
- ②頭部と胸部を区切る横位太線刻は「頸部」と見做せる。昆虫の羽のように見える縦位弧状太線刻区画も上半部と腕部との境界表現と考える。
- ③報告書実測図に表現された放射状の細線刻は、裏面でも確認された。少なくとも正面に右肩下がりです計 8 条、裏面に計 4 条認められる。線の重複関係から、これらの細線刻は太線刻よりも先に描かれている。
- ④裏面の頭部と下部に「両目」と同幅の細線刻があるが、これらも意図的な表現の可能性がある。ただし、どのような表現なのかは不明である。
- ⑤人体の抽象的表現形と仮定すると、下端部のやや深めの太線刻は、脚部表現の可能性がある。

以上の資料的特徴から、「ヴィーナス型ペンダント」は、人形を模した石偶（岩偶）と再評価する。太線刻は身体区画表現と理解したい（図 8・9）。当資料には頭部、上半部、下半部を区画する横位線刻と、腕部と体部に区画する縦位線刻が描かれているとした。シベリアのマリタ遺跡において、マンモス牙製のヴィーナス像のなかにも人体区画線があり（図 10・図版 10・11）、両手両足が表現され、両目がニュアンス程度の細い線で描かれているものがある（図 10・図版 11:139・141 等）。

マリタ遺跡のヴィーナス像は厚みのあるものは乳房や臀部が表現されているが、細長い棒状のものは乳房表現が明確でない。また、棒状は線刻が連続的なものが一定量認められる。それらと比較して峠山牧場の石偶はマリタの棒状表現をさらに簡略化したものと捉えうる。人体全体を表現している点は、春成（2012）の「旧石器時代女性像集成」と竹花（2018）所収のグラヴェット文化のヴィーナスの像を参照する限りでは、ヨーロッパ～シベリアのグラヴェット文化期に認められる表現方法と捉えうる。一方、グラヴェット文化期よりも新しいマドレーヌ文化期併行期のシベリアのヴィーナス像は、臀部が強調されるものの、明確な頭部や四肢表現が少なく、人形か否かの判別も困難なもので、女性器を模したものが多く傾向にある（第 10 図・図版 15）。

以上の特徴から、峠山牧場の石偶はグラヴェット文

化の表現方法と考える。

（2）技術的特徴と帰属年代 3 説

「第 3 項 諸問題」で触れたように、峠山牧場の石偶は帰属時期の問題が解決されていないが、大別すると縄文草創期、細石刃文化期、ナイフ形石器文化期の 3 説が有力となろう。

草創期説は愛媛県上黒岩遺跡出土の石偶（線刻礫）が比較対象となる。上黒岩遺跡石偶出土の第 9 層は 14,500ca1. BP. の年代が与えられており、ここから扁平な緑色片岩の小礫に、髪の毛、乳房、スダレ状、鋸歯状、肛門が描かれた石偶が出土している（春成 2009・2012）。乳房表現からは女性が想定される。四肢表現はない（図 10・図版 16:253～265）。一方、峠山牧場の石偶には横位線があり、その下方にスダレ状の斜条線刻が描かれており、スダレ状は上黒岩と類似の表現である。素材の滑石片岩は緑色で色彩も上黒岩と類似する。ただし、上黒岩の石偶は顔・四肢を描かない点で、峠山牧場とは異なる。以上の類似点と、第 3～6 文化層中に草創期資料が混入している可能性も考えられることから、草創期説には一定の説得力がある。

次に細石刃石器群説だが、前述のとおり石川（2020）で、北方系の細石刃文化に系譜をもつものとの意見が提出されている。なお、石川（2020）では具体的な年代の推定までは行われていない。年代については 19,000ca1. BP. 以降の北方系細石刃石器群の南下時期とみるか、AT 降灰後の LGM にあたる 25,000ca1. BP. 頃の古北海道島の出現期細石刃石器群を伴う集団との接触があったとみるかの 2 者が想定される。

ナイフ形石器石器群説は、ブロックの密集状況と層位を根拠とする報告書記載内容を大枠で指示するものであるが、文化層区分については課題を残す。大枠で AT 降灰後の第 3～5 文化層を一纏めでみると、ナイフ形石器は概ね関東地方の武蔵野 IV 層下部～V 層段階から IV 層上部段階までの石器群に対比され、29,000～23,000ca1. BP. が想定される。そして、石偶の出土ブロック内の石材は寸詰まりの石刃を量産する石刃製作技術によって消費されている。層位的根拠が曖昧なことから、疑義が提出されている（石川 2020）が、石偶がナイフ形石器石器群に伴わないと断定できる状況でもない。石偶と同文化層に位置づけられているブロック 28 の垂飾品とブロック 6 の「装飾品未成品」とされる剥片も滑石片岩と報告され、峠山牧場から東に 4 km 程

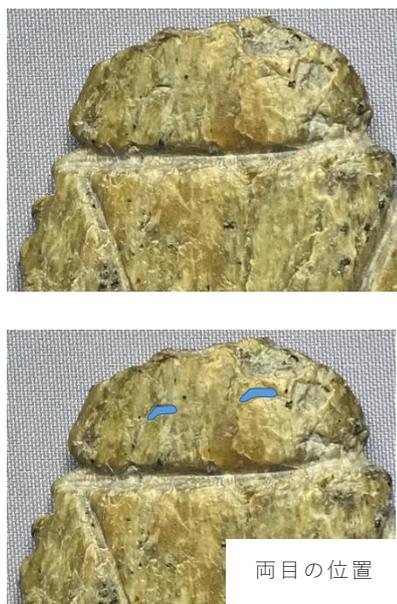


図6 正面頭部の拡大写真



図7 峠山牧場I遺跡A地区の石偶 (2022.7.22撮影)

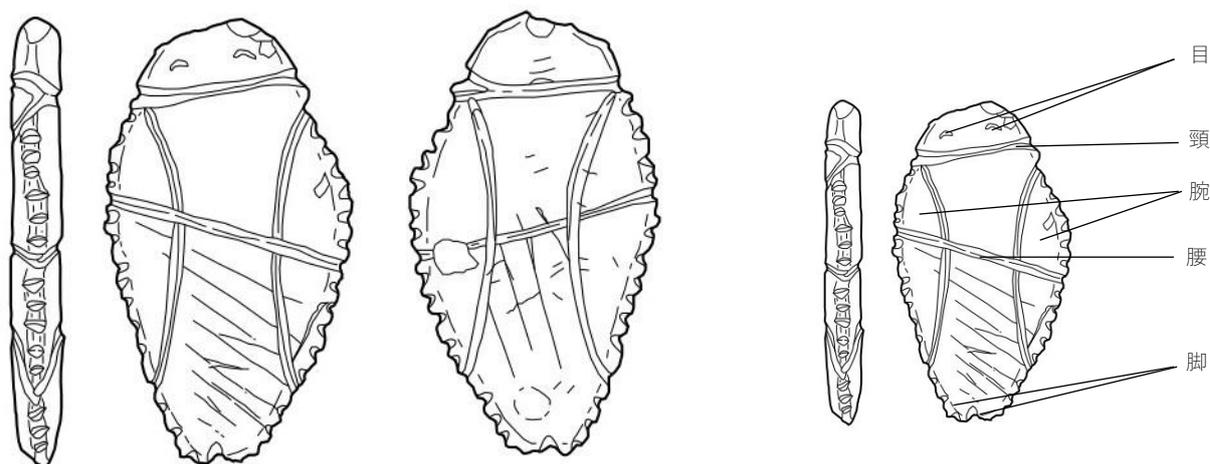


図9 石偶の部位想定図

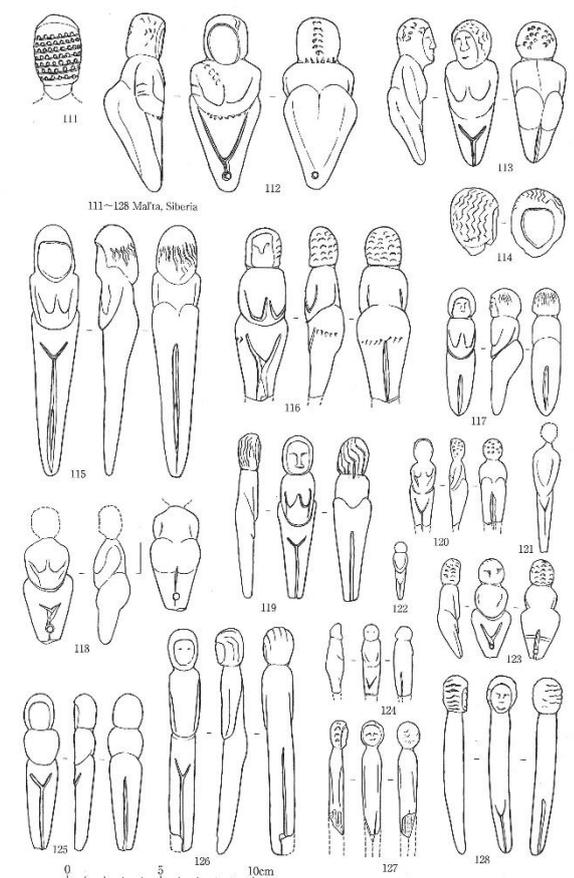
図8 峠山牧場I遺跡A地区の石偶実測図(1999報告書図面に目と裏面のスタレ状線刻を追記し、再トレース)

度離れた和賀仙人鉾山産と考えられる。一方、隣接する峠山牧場I遺跡B地区の縄文前期～中期の装飾品利用石材は粘板岩、流紋岩、凝灰岩、緑色凝灰岩、斑岩砂岩と少量の滑石が報告されており、バラエティに富む。わずかな違いであるが、旧石器時代と縄文時代の装飾品では嗜好石材が異なる可能性がある。細石刃石器群の事例も含めると、古日本列島の旧石器人はカンラン石のような高硬度の石材も装飾品に利用するもの

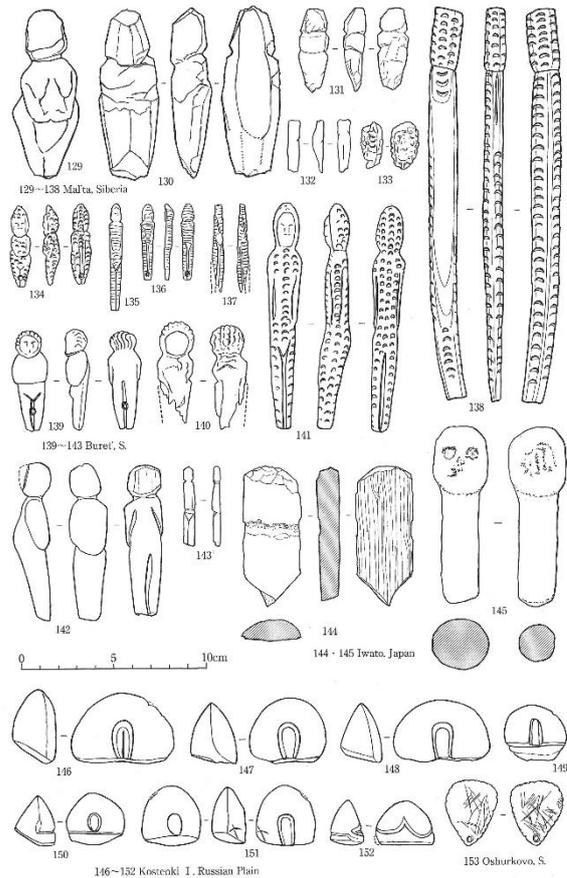
の、琥珀・滑石・牙などの軟質材を好んで利用しており、峠山牧場資料はこの傾向と調和的である。

まとめると各説の特徴は下記のとおりである。

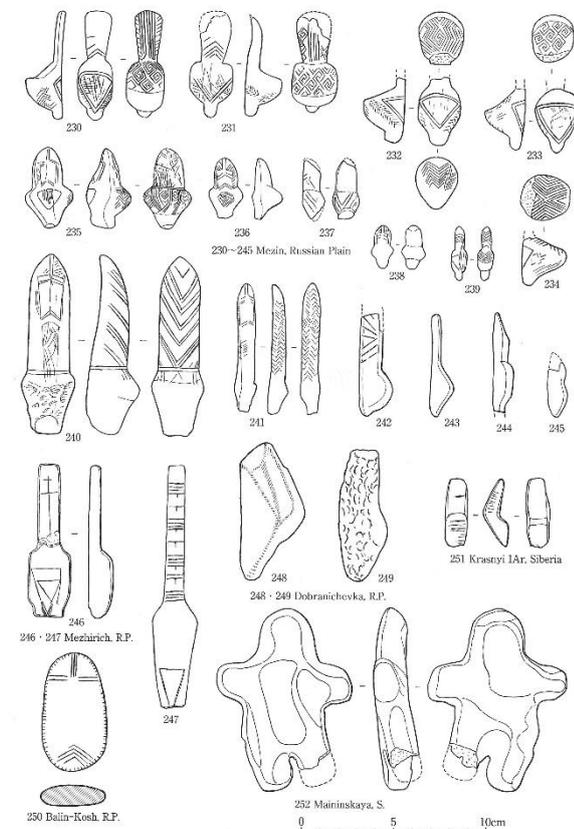
- ①草創期説：14,500cal. BP.の上黒岩遺跡線刻石製品と色調、扁平素材選択、スタレ状表現が類似する。
- ②細石刃石器群説：19,000cal. BP.の北方系細石刃石器群の古本州島への南下を根拠とする。



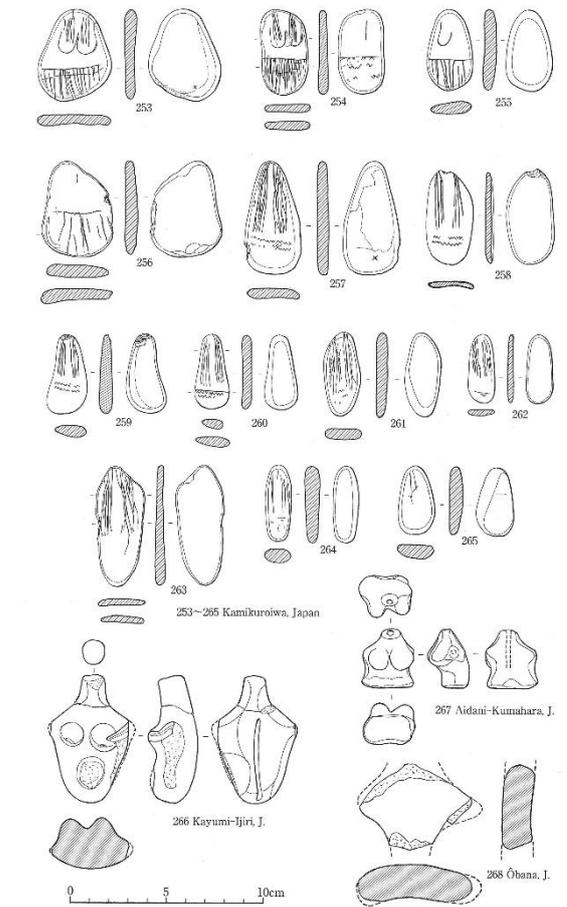
図版10 後期旧石器時代前半のシベリアの女性像 (111～125・127・128 マンネス身軀, 126 トナカイ角軀) 111～128 マリタ



図版11 後期旧石器時代前半のシベリア・日本の女性像と女性象徴 (129～145 マンネス身軀, 141～145 網品片岩製, 146～152 石製, 153 石製) 129～138 マリタ, 139～143 ブレティ, 144・145 岩戸, 146～152 コスチンキ1, 153 オシホロコフ, S



図版15 後期旧石器時代末のロシア平原・シベリアの女性像 (229～247・251 マンネス身軀, 248・250 砂岩製, 249 砂岩製, 252 土製) 230～245 メジシ, 246・247 メジリナ, 248・249 ジブアチニキツカ, 250 パリシニコシニ, 251 クラスノイ・アル, 252 マンネス身軀



図版16 晩期旧石器時代(縄文時代草創期)の日本の女性像 (253～255 燧石片岩製, 256～258 土製) 253～255 愛媛・上黒岩, 256 三笠・須見井尻, 257 徳島・相谷瀬原, 258 三笠・大島

図 10 ロシア平原・シベリア・日本の女性像と女性象徴 (春成 2012 の「旧石器時代女性像集成」より転載)

③ナイフ形石器石器群説：人体全体を描くグラヴェット文化期のヴィーナス表現に類似する。接合資料やブロック内石材などから AT 降灰後の石器群であり、後期旧石器時代後半期のナイフ形石器石器群が存続した 29,000～23,000cal. BP. を想定する。

まとめ

「ヴィーナス型ペンダント」として報告された石製品の新知見が得られた。「両目」の発見を契機に、人体が表現された石偶と判断した。この石偶は頭部、両目、両腕、両脚、スタレ状（腰蓑か？）の表現がある。

年代は縄文草創期・細石刃文化期・ナイフ石器文化期のいずれかに絞られるが、石偶のデザインからユーラシアでグラヴェット文化が盛行する時期と併行するナイフ形石器文化期が有力と考える。

おわりに

一先ず筆者は峠山牧場 I 遺跡 A 地区の石偶をグラヴェット文化期に系譜を持つものとの立場をとる。すなわち、薄い層厚や文化層認定等の問題を抱えながらも当資料は旧石器時代の芸術作品として貴重な存在であり、我が国の先史芸術を語る上で欠くことのできない資料と考える。

また、石偶との再評価によって、峠山牧場 I 遺跡を見る目も少し変わってくる。マリタ遺跡の住居状範囲と女性像の出土位置の分析から、「人間のさかんな生殖を祈る護符としての役割ばかりでなく、住居の建設・廃棄の儀礼に深く結びついていたものと推測せらる」（木村 1993・1997）との重要な指摘がある。峠山牧場 I 遺跡にも住居状施設が存在したと捉え直すと、遺跡の性格や「場」の利用方法を見直すよい契機となる。

課題としては、石偶の人体表現がどのようにして古本州島にもたらされたのか根拠やモデルを示す必要があるが、現状ではユーラシアに起源をもつ集団の直接的な移動ではなく、集団間のネットワークを介したヴィーナス表現の伝播によるものと理解しておく。後期旧石器時代前半期には、古北海道島と古本州島で台形様石器や石刃石器群等が共通して変遷するので、津軽海峡が超えて石器製作技術を共有可能なネットワークがあった。また、LGM の 28,000～23,000cal. BP. に本県域に生息した花泉動物群には、古北海道島に生息したマンモス動物群のうち、マンモスを除くオオツノジカ、ハナイズミモリウシ、オーロックス等が含まれ、これ

らの動物は氷橋を渡って古本州島へ南下したと考えられている。動物を追う古北海道島と古本州島の集団間に接触の機会がたびたびあり、情報交換が行われ、石偶デザインを共有した時期もあったと想定する。

なお、本稿は両目の発見をもとに立論したもので、先学による数々の先史芸術に関する研究を十二分に検討したうえでの論ではない。新知見とした部分について、先行研究と重複する内容があったとすれば、プライオリティはそちらにある。

謝辞

最後になりましたが、岩手県庁並びに岩手県立埋蔵文化財センターには資料調査での便宜をいただきました。竹花和晴先生には、資料検討に際し貴重なご意見と先史芸術に係る文献を賜りました。石川恵美子氏には、峠山牧場の石器群に関する問題について貴重なご意見を賜りました。記して御礼申し上げます。

参考・引用文献

- 石川恵美子（2020）「岩手県峠山牧場 I 遺跡 A 地区における細石刃石器群の再評価」『常木見先生退職記念論文集 世界と日本の考古学 -オリーブの林と赤い大地-』六一書房 pp. 273-290.
- （財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1999）『峠山牧場 I 遺跡 A 地区発掘調査報告書』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 291 集
- 木村英明（1993）「マリタ遺跡（3）」『旧石器考古学』46 旧石器文化談話会 pp. 3-20.
- 木村英明（1997）『シベリアの旧石器文化』北海道大学図書刊行会 pp. 314-323.
- 竹花和晴（2018）『グラヴェット文化のヴィーナスの像 旧石器時代最大の美と知のネットワーク』雄山閣
- 堤隆（2011）『列島の考古学 旧石器時代』河出書房新社
- 長沼孝（2010）「装飾品と顔料」『講座日本の考古学 2 旧石器時代 下』青木書店 pp. 301-325.
- 春成秀爾（2008）「上黒岩ヴィーナスと世界のヴィーナス」『歴史フォーラム 縄文時代のはじまり -愛媛県上黒岩遺跡の研究成果-』六一書房 pp. 40-72.
- 春成秀爾（2012）「旧石器時代の女性像と線刻礫」『国立歴史民俗博物館研究報告』172 集 pp. 40-72.
- 米田寛（2022）「旧石器時代出土装飾品の様相」『岩手考古学会第 53 回研究大会 岩手県の出土装飾品に関する考古学的研究』岩手考古学会

要 旨

本論は岩手県西和賀町峠山牧場 I 遺跡 A 区出土の石偶に関する報告である。ヴィーナス型ペンダントとして報告されていた滑石片岩製石製品について検討し、両目、両腕、両脚、スダレ状（腰褌か？）が表現されていると解釈した。これらの表現は、ユーラシアに 30,000～25,000cal. BP. に広がっていたグラヴェット文化の特徴をもつ。

キーワード：西和賀町峠山牧場 I 遺跡 A 地区、旧石器時代、石偶、グラヴェット文化併行期